邪馬臺國越前說

高田　友

抑〻邪馬臺國のいづくにありしやに就て九州說と大和說の爭ひあるは周知の儀なれど、さらに今一つこれに比定せらるる地あり。

さは、高志國にありきとの說なり。高志は越の國の謂ひなるが、越のうちにても越前、如今福井縣なり。仔細を申せば、福井縣鯖江市。縣第四の都市にて、越前市（武生／府中）の北に接す。因みに「越」なる名は、都（難波・大和）より訪れむが爲には山々を越ゆるの要あればなり。

この地に比定せらるる所以は樣々擧ぐるを得れど、彌生時代末期には、農業生產高本朝に比類なきの地にて、剩へ今日なほ鐵器の發掘甚だ多しとの由。

魏志倭人傳に示されたる邪馬臺國の位置はその解釋多岐に別るるあり。大和說・北九州說の出來せる由來なれど、方角距離などを檢するに越前にありきと攷ふとも牽強附會と笑殺せらるべきにはあらず。

尚、邪馬臺國の讀みは、「ヤマタイ國・ヤマイ國」の兩說あり、卑彌呼後嗣（後述）の名も「トヨ」なりや「イヨ」なりや定かならず。

讀みの別るるは、「台」の正字「臺」、「壱」の正字「壹」なるに由來す。「魏志倭人傳」にて正字の用ゐらるるは言ふに及ばず。而して、「臺」と「壹」は字形相似ること、混同せむも宜なり。「魏志倭人傳」の寫本にては「臺」の用ゐらるるも、「壹」の誤寫ならずやと疑はるる所なり。「臺」ならば「タイ」、「壹」なれば「イ」と言ふべからむか。

但、さ卽斷なし給ひそ。「壹」ならで「臺」なりしとせむとも、改めて「臺」の字をいかが讀むべきと惑はずんばあらず。「臺（台）」を「タイ・ダイ」と讀むは皇朝の音讀なり。唐土の人「臺」と書きたらむとも、往古の倭人我が朝を「ヤマタイ」と讀みたりきと斷ずるを得ず。寧ろ、上代國語の音韻體系より見れば、「タイ」の如く母音連續(ai／×聯續)するは異樣の事。兩國の言語史音韻史を勘案すれば、「ヤマタ」または「ヤマト」あるいは「ヤマド」なりしにあらずやと察せらるる所なり。

「ヤマタイ」にあらで「ヤマト」なりとすとも、「然則、邪馬臺國は大和にありき」との結論を直に引き出すを得るにはあらず。「ヤマト」なる地名は我が神洲到る所に見るを得ればなり。

「越前說」には、今一つ首肯せらるる傍證あり。

邪馬臺國の女王卑弥呼歿せるは西暦二四八年なりき。然るに此の年九月五日（新暦）に本朝にて皆既日蝕を見るを得たり。皆既日蝕はいにしへより爲政者の不德の爲す所（所爲）なりと信ぜられ、忠臣藏の時世、靈元天皇一宮（第一皇子）の廢嫡せられ給ひしは、「日蝕の日に生れたれば不吉なり。登極し給ふに相應しからず」とのゆゑなりきと傳へらる。洵は外戚の權弱きによりて異母弟に劣後したるに過ぎざれど。

於是、近來の學者は、卑彌呼の歿したるは、日蝕出來せる、すなはち卑彌呼の天によりて放伐せられたるを示すに相違なしとて弑せられたるにあらずやと疑ふ向きあり。時恰も、國內治まりて久しかりしも忽然戰亂勃發したるを卑彌呼の責に歸したるならむといふ。

さらに、天照大神の天岩戸に隱れたまひし故事は、この日蝕ありて卑彌呼の歿したるがゆゑに生れたりけむとの說を唱ふる者尠なからず。已哉、卑彌呼こそ八百萬の神々を生み奉りし物語の濫觴なりけめといふべきか。

然るにまたこの理は反轉す。現代天文考古學の說く所に據れば、豈圖らむ、北九州にても大和にても、二四八年の日蝕は皆既に至りしにはあらずとの由。

これが皆既日蝕帶は能登半島より常陸・磐城へ向ひ、太平洋へぞ拔くる。高志國鯖江のわたりにては、全き皆既にはあらずといへども、蝕分それに近くして、さこそは神祕を感じたりしと思はるれ。然而、北九州および大和に於ては、異とするに足らざる部分日蝕なれば、古代人怖ぢ戰くまでの天變地異とは言ふを得ざりしか。

これ、邪馬臺國越前說の堅固なる根據なりとぞ。

邪馬臺國論攷。九州說と大和說の外に、越前說ありとは知りたまへかし。

卑彌呼歿したる後、倭國（邪馬臺國聯合）男王の下に再び大亂あり。畢竟女人を君として仰ぐに如くなしとて、卑彌呼の宗女（係累）「臺與」を立てて女王と爲し、これにより世は治まりき。「臺與」は「トヨ」と讀むが通例なれど、これまた「臺」は「壹」の誤寫なりと唱ふる者多く、「イヨ」なりきとの說も出でてあり。

なほ、この人、卑彌呼宗女なりといへども、卑彌呼歿後に出生し、卽位の砌いまだ十三歲なりしとなむ傳へらるる。

卑彌呼死して臺與の立ちたるに據りて、天照大神の岩戸に隱れて再び出で來たりたまひし神話の生じたりと說くもあり。卑彌呼甦り臺與と成りて生れましたりとの由。

震旦「晉書」に、「二六六年、倭女王朝貢す」との記事あり。臺與の儀なりと解せらる。

この朝貢より後、唐土史書に本朝の記載悉皆(しつかい)途絶え、再度現はるるは四一三年。以後、倭の五王の時世(ときよ)となる。この間の時期を「空白の百五十年」「空白の四世紀」と呼稱す。

（令和六年四月二十四日受附）